第５章　科学分析

１　放射性炭素年代（ＡＭＳ）測定分析

（１）分析資料と結果

西四ツ屋遺跡・表町遺跡は、全体的に埋土からの出土遺物が少なく、縄文時代陥し穴をはじめとして、遺構の時期決定が難しい状況であった。そのため、時期推定の参考として、埋土中からの出土資料を用い放射性炭素 ^{14}C による年代測定を行った。また一部資料については、遺構の同時代性の推定、土器編年による年代観との比較検討、地山形成年代の推定も目的とした。分析は、パリノ・サーヴェイ（株）、（株）パレオ・ラボ、（株）加速器分析研究所に委託して行った。複数の業者に委託したが、測定値をみる限り、影響はなかったと思われる。その結果は下記の通りである。

第７表　年代測定分析試料と結果

分析№	遺跡名	試料採取位置	分析試料	採取地の性格	暦年較正年代範囲（yrBP ±１σ）	実施年度	試料№	備考（業者、ラボコード）
1	西四ツ屋	SB01　１層下部	炭化材	竪穴住居跡	801 － 883AD	H16	1	パリノ　IAAA-41745
2	西四ツ屋	SB01　１層下部	炭化材	竪穴住居跡	779 － 887AD	H16	2	パリノ　IAAA-41746
3	西四ツ屋	SK46　１・２層境	炭化物	土坑	806 － 898AD	H16	3	パリノ　IAAA-41747
4	表町	SK13　３層　中位	炭化物	土坑	1640 － 1670AD	H17	1	パレオ　PLD - 5691
5	表町	SK20　３層　底部近く	生材（手馬鍬）	井戸跡	1540 － 1600AD	H17	2	パレオ　PLD - 5692
6	表町	Sk101　４層　中位	生材（枝）	井戸跡	1550 － 1640AD	H17	3	パレオ　PLD - 5693
7	表町	SK372　１層上部	炭化物	井戸跡	1435 － 1455AD	H17	4	パレオ　PLD - 5694
8	表町	SK544　３層　中位	生材（枝）	井戸跡	1510 － 1600AD	H17	5	パレオ　PLD - 5695
9	表町	SD01　２層　底部近く	炭化物	溝跡	1450 － 1510AD	H17	6	パレオ　PLD - 5696
10	表町	SK601 １層　中位	炭化物	土坑	1250 － 1285AD	H18 - 1	1	加速器　IAAA-60518
11	表町	SK619　４層　坑底ピット	炭化物	陥し穴ⅡＥ	Modern(現代)	H18 - 1	2	加速器　IAAA-60519
12	表町	SK605　８層　中位	炭化物	井戸跡	1550 － 1640AD	H18 - 1	3	加速器　IAAA-60520
13	表町	SK613　８層　中位	炭化物	井戸跡	1450 － 1520AD	H18 - 1	4	加速器　IAAA-60521
14	表町	SD21　１層　中位	炭化物	溝跡（区画溝）	1470 － 1530AD	H18 - 1	5	加速器　IAAA-60522
15	表町	SD21　２層　底部近く	炭化物	溝跡（区画溝）	1520 － 1590AD	H18 - 1	6	加速器　IAAA-60523
16	表町	SK604　４層　底部近く	炭化物	陥し穴ⅠＣ	1530 － 1490BC	H18 - 2	1	パレオ　PLD - 6909
17	表町	SK715　５層　底部近く	炭化物	陥し穴ⅡＧ	3500 － 3450BC	H18 - 2	2	パレオ　PLD - 6910
18	表町	SK797　４層　底部近く	炭化物	陥し穴ⅠＡ	1115 － 1025BC	H18 - 2	3	パレオ　PLD - 6911
19	表町	SK804　１層　中位	炭化物	陥し穴ⅠＤ	1260 － 1190BC	H18 - 2	4	パレオ　PLD - 6912
20	表町	SK708　３層　中位	炭化物	陥し穴ⅠＡ	1460 － 1420BC	H18 - 2	5	パレオ　PLD - 6913
21	表町	SK616　１層　中位	炭化物	陥し穴ⅡＥ	6230 － 6100BC	H18 - 2	6	パレオ　PLD - 6914
22	表町	SK828　３層　中位	炭化物	井戸跡	1540 － 1600AD	H18 - 2	7	パレオ　PLD - 6915
23	表町	SK982　７層　中位	生材（半割材）	井戸跡	1520 － 1590AD	H18 - 2	8	パレオ　PLD - 6916
24	表町	ST12　P11 層上部	炭化物	掘立柱建物跡	1470 － 1530AD	H18 - 2	9	パレオ　PLD - 6917
25	表町	SB04　P12 層　底部	炭化物	竪穴住居跡	430 － 490AD	H18 - 2	10	パレオ　PLD - 6918
26	表町	SK1583　５層　底部近く	炭化物	陥し穴ⅡＦ	4045 － 3980BC	H19	1	加速器　IAAA-70998
27	表町	SK1602　１層上部	炭化物	陥し穴ⅠＣ	800 － 880 ＡＤ	H19	2	加速器　IAAA-70999
28	表町	SK1643　２層　底部近く	炭化物	土坑	760 － 830 ＡＤ	H19	3	加速器　IAAA-71000
29	表町	SK1121　１層　中位	炭化物	土坑	1540 － 1640AD	H19	4	加速器　IAAA-71001
30	表町	SK1483　１層　中位	炭化物	土坑	1335 － 1390 ＡＤ	H19	5	加速器　IAAA-71002
31	表町	SK365　７層　中位	炭化物	井戸跡	1550 － 1640AD	H19	6	加速器　IAAA-71003
32	表町	SK361　１層　中位	炭化物	大型方形土坑	1520 － 1590AD	H19	7	加速器　IAAA-71004
33	表町	SK707　１層　底部近く	炭化物	大型方形土坑	1440 － 1520 ＡＤ	H19	8	加速器　IAAA-71005
34	表町	SF01　火床面	炭化物	焼土坑	575 － 640AD	H19	9	加速器　IAAA-71006
35	表町	SK1599　５層	馬歯	土坑	1760 － 1800 ＡＤ	H19	10	加速器　IAAA-71007
36	表町	SK574　１層　中位	炭化物	大型方形土坑	1450 － 1520AD	H19	11	加速器　IAAA-71008
37	表町	SK1603　１層　中位	炭化物	土坑	685 － 775	H19	12	加速器　IAAA-71009
38	表町	５区Ⅶａ層	炭化物	地山泥炭層	30470 － 30100BC	H19	13	加速器　IAAA-71010
39	表町	３区Ⅶａ層	炭化物	地山泥炭層	36700 － 36100BC	H19	14	加速器　IAAA-71011
40	表町	SB09　床面	土器付着炭化物	内黒土器内面	770 － 870 ＡＤ	H19	15	加速器　IAAA-71012
41	表町	SB10　床面	土器付着炭化物	土師器甕内面	680 － 810 ＡＤ	H19	16	加速器　IAAA-71013
42	表町	ST27 P3（SK1522）	土器付着炭化物	土師器甕外面	685 － 755 ＡＤ	H19	17	加速器　IAAA-71014
43	表町	SK19 １層　中位	土器付着炭化物	内耳鍋外面	1550 － 1630AD	H19	18	加速器　IAAA-71015

（２）分析結果に対する所見

遺構の時期推定については、遺物のほとんどない縄文時代陥し穴で特に参考とした。溝状陥し穴（Ⅰ群）は、分析№.16（以下№.はすべて分析№.）、18 ～ 20、27 が該当し、最古が№.16 の 1530 － 1490 ＢＣ、最新が№.18 の 1115 － 1025 ＢＣとなった。№.27 は、すぐ近くに平安時代竪穴住居跡があり、住居跡由来の炭化物が混入した可能性がある。楕円形・円形陥し穴（Ⅱ群）は、№.11、17、21、26 が該当し、№.21 が 6230 － 6100 ＢＣ、№.26 が 4045 － 3980 ＢＣ、№.17 が 3500 － 3450 ＢＣとなった。№.11 は陥し穴底部のピット内から出土した試料であるが、現代の年代値を示した。この周辺はリンゴ畑で、陥し穴底部には、細かい木根が入り込んでいた。それに伴い混入した可能性がある。本報文では、出土土器の観察結果をもとに、この測定値を参考として、陥し穴の時期をⅠ群が縄文時代後期、Ⅱ群は早期および前期と推定した。

縄文時代の実年代については、年代測定技術の発達と暦年代への換算に対する蓄積が進んでいる。最近では、縄文時代時期ごとの暦年代推定値について、早期が 9500 － 5000 ＢＣ頃まで、前期が 3520 ＢＣ頃まで、中期が 2470 ＢＣ頃まで、後期が 1270 ＢＣ頃までとする研究成果が出されている（小林謙一 2008）。これにあてはめると、Ⅰ群は晩期まで下ることとなる。また、Ⅰ群の№.18・20 といった同列の陥し穴でも大きな差がみられる。このことは、陥し穴の使用期間と炭化物が埋土に混入した時期は必ずしも一致しないことなどがあると考えられる。そのため、測定値はあくまでも参考とした。

遺構の同時代性については、まず数多くみつかった井戸跡について注目した。井戸跡に時期差がみられれば、集落の開始や変遷を考える上での材料となると考えたからである。結果として大差はなく、16 世紀前半を中心とする戦国時代に集中した。№.7（SK372）では 15 世紀代のやや古い値がみられた。この遺構の上部には現代の耕作に伴う積み石がされており、試料はそのすぐ下の 1 層中から採取された。現代礫下部と 1 層上部は入り組んでおり、この試料が混入したことも考えられ、分析値が必ずしも遺構の実年代をあらわしていない可能性がある。個々の井戸跡からの出土土器様相においては違いがみられず、結論として、井戸跡に大きな時代差はないと判断した。また、№.14・15 の区画溝と想定される SD21 や№.32・33・36 の大型方形土坑との比較でも大きな時代差はみられず、本遺跡の中世集落は 15 世紀後半から 16 世紀前半の戦国時代に集中して営まれたと判断する参考材料となった。

土器編年による年代観と ^{14}C 年代との比較検討については、№.40 ～ 43 が該当する。№.40 は竪穴住居跡（SB09）から出土した内黒杯（107）の内面に吸着されていた炭化物、№.41 は竪穴住居跡（SB10）から出土した土師器甕（132）の底部内面に付着していた炭化物である。SB09 からは須恵器が全く出土せず、SB10 からは多くの須恵器がみつかった。測定値は、須恵器をもつ SB10（№.41）が 680 － 810AD で 7 世紀末から 9 世紀初、須恵器をもたない SB09（№.40）が 770 － 870AD で 8 世紀末から 9 世紀後半を示した。上信越道発掘調査において検討された北信地方の土器編年では、食膳具における須恵器の消滅は 9 世紀中期～後半とされている（鳥羽 2000・上田 2000）。結果は、SB10 が SB09 より古い時代とされたことも含めて、土器編年と概ね合致する分析値であった。

№.42 は掘立柱建物跡（ST27）柱穴より出土した土師器甕（144）の外面に付着していた炭化物である。測定値は、685 － 755AD で 7 世紀末から 8 世紀後半を示し、9 世紀代と比定している建物跡の年代観よりやや古い。これについては、外面付着炭化物のもとと思われる燃料材が樹幹の部分であれば、その年輪分古くなった可能性（小林他 2007）などが考えられる。

№.43 は戦国時代土坑（SK19）から出土した内耳鍋（226）外面に付着していた炭化物である。測定値

は 1550 － 1630AD で 15 世紀～ 16 世紀初を示した。本遺跡で出土した口縁部がほぼ直立する形状の内耳鍋は、長野県内における土器編年（野村 1990、市川 2005）では、15 世紀後半～ 16 世紀前半頃が中心とされている。測定値はやや新しいが、使用された期間などを考えれば、概ね合致する分析値と思われる。

地山形成年代の推定については、2 章 1 節の地理的環境で述べたとおりである。

2　樹種同定分析

（1）　分析資料と結果

表町遺跡では、戦国時代井戸跡が多数確認され、埋土中から多くの木製品が出土した。戦国時代の樹種選択・樹種利用の様子を知るために、それら木製品の樹種同定を行った。また、西四ツ屋遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化材についても樹種同定を行った。この炭化物は住居廃絶後生じたとみられるが、同様の例が、飯綱町前田遺跡の平安時代住居跡 2 軒で確認されている。この時の炭化材はナラ材であった（島田他 1981）。これとの事例検討を目的とした。

分析は、パリノ・サーヴェイ（株）、（株）パレオ・ラボに委託して行い、その結果は下記の通りである。

第８表　樹種同定分析試料と結果

分析No.	遺跡名	試料採取位置	分析試料	樹種	備考（業者、試料No.）
1	西四ツ屋	SB01（住居跡）	炭化材	コナラ属（コナラ・クヌギ）	パリノ　H16-1・2
2	表町	SK20（井戸）	手馬鍬	サクラ属	パレオ　H17-7・8
3	表町	SK101(井戸)	臼	カバノキ属	パレオ　H17-9
4	表町	SK544（井戸）	そり	アカマツ	パレオ　H17-11
5	表町	SK544（井戸）	蒸篭底板	ヒノキ	パレオ　H17-12
6	表町	SK544（井戸）	漆椀	ブナ属	パレオ　H17-13
7	表町	SK593（井戸）	曲物	ヒノキ	パレオ　H17-14

（2）分析結果に対する所見

No. 1 の炭化物は、コナラ・クヌギとされ、前田遺跡と同様のコナラ属であった。コナラ・クヌギ類は、良質の燃材となるので、薪炭材として広く用いられた（四手井綱英 1985）。佐久市などでは、平安期の住居構築材や燃料材としての利用例が多くみられる（パリノ・サーヴェイ 1992）。この炭化物も住居構築材や燃料材に由来する可能性が考えられる。

井戸跡から出土した木製品に使われた樹種は、アカマツ・ヒノキの針葉樹と、ブナ属・カバノキ属・サクラ属の落葉針葉樹であった。ともに温帯～冷温帯に生息する樹種で、遺跡周辺の植生環境と符合するものである（牟礼村 1997）。

No. 2 の手馬鍬（304）に使われたサクラは、堅く耐久性があり、地元では現在でも、鍬の柄など農具として利用されている樹種である。No. 3 の臼（307）は、ケヤキなど広葉樹材の利用が知られており（三輪茂雄 1978）、これも落葉広葉樹のカバノキ属であった。No. 4 のそり（308）にはアカマツが使われていた。そりにはナラ、サクラなどの堅木がよく使われる（朝岡康二他 1997）。アカマツを使った例は、民具例なども調べたがみられなかった。アカマツは遺跡周辺で多くみられる樹種であり、入手しやすいものでつくったものと思われる。No. 5 の曲物（301）とNo. 7 の蒸篭底板（302）も長野県内における代表的有用針葉樹材（植田弥生 2006）のヒノキであった。No. 6 の漆椀（299）はブナ属であった。漆器は、古代において貴重品であり、律令体制の中で国の管理化におかれていた。しかし、平安時代も後期になると国家権力は衰え、国衙や郡単位に確保されていた塗師や木地師などの工人は自立の道を求めて、各地で新たな漆器生産を始めた。それに伴い、古代では主にケヤキが使われていた漆椀も、安価なブナやトチノキなど多様なものが選択されるようになったとされる（四柳嘉章 2006）。No. 6 の漆椀もこの流れに合致する。

これら分析結果から、本遺跡出土の木製品は、地元の森林を背景に、その目的に合わせた樹種選択・樹種利用がなされていたと考えられる。

第6章　総　括

主要地方度長野荒瀬原線建設に伴う発掘調査は、平成16年から19年まで、4年間にわたって行われた。これまで牟礼地区で大規模な発掘調査があまり行われておらず、未知の部分が多い。今回の調査は、牟礼地区の歴史を考えていく上で、大きな資料を提示することとなった。

本書において記述した内容は、発掘された遺構・遺物については網羅しているが、これが、四ツ屋・表町地域の歴史のすべてではない。報文中では遺構がなかったためほとんど触れることができなかった近世にかけての様相も含め、発掘調査の成果と、それに関わる文献史料などを合わせながら、この地域の歴史を考え、総括としたい。

発掘調査によって確認できた最も古い生活痕跡は、縄文時代である。多くの陥し穴がみつかり、この地一帯が狩猟場となっていたことがわかった。時期は、最も古いもので、縄文時代早期（約8,000年前）頃につくられた可能性がある。その後、縄文時代前期末（約6,000～5,500年前）頃にもつくられた。さらに縄文時代後期（約3,500年前）頃、細長い溝状の陥し穴が、広い範囲に列をなしてつくられた。

これらの陥し穴をつくった人々の居住地はどこであったのだろうか。表町遺跡周辺では、前期住居跡は南西約3.5㎞の丸山遺跡と北東約4㎞の小野遺跡、後期住居跡は前述の小野遺跡と南西約2㎞の明専寺遺跡で確認されている。また、北東約1㎞の橋詰遺跡からは大量の後期～晩期縄文土器が出土し、近くに集落の存在が考えられている。動物考古学の研究では、半径5㎞程度の範囲に生息するシカ・イノシシの数はそれぞれ数頭以内で、ほぼ1年で獲りつくしてしまうだろうと推測され、それらを対象とした生業については、数十㎞四方程度の広いテリトリーが必要とされている。あわせて、そのテリトリーは一つの集落のものではなく、複数の集落が重複していた可能性も考えられている（西本豊弘1994）。このことから、前にあげた周辺の縄文集落はもちろんであるが、さらに広範囲の人々が表町周辺で、繰り返し陥し穴をつくり、狩猟を行っていた可能性が考えられる。

長い空白期間をあけて、次にみつかった生活痕跡は、平安時代前期の集落跡である。出土遺物から、9世紀代に営まれた集落とみられる。さらに詳細な土器観察や、掘立柱建物構造の特徴などから、集落は、しっかりした掘立柱建物が存在する1段階、竪穴住居と掘立柱建物が混在する集落が出現・展開する2段階、その集落が分散・衰退する3段階の三つの段階に分けられると考えた。飯綱町における平安時代集落の調査例は少なく、また調査規模も小さいためその傾向を検証することは難しいが、最近調査された田中下土浮遺跡（笹澤2004）との比較では、掘立柱建物はなかったものの、9世紀～10世紀前半にかけて、集落の展開から分散という同様の状況がみられた。この集落は、律令制解体期において、地方有力者が勢力を拡大していく中で、計画的につくられた可能性も考えられる。またその背景には、牟礼付近が属していた「太田庄」との関係も想定される。

当初から成果が期待されていた戦国時代集落については、伝承どおりその存在が確認された。存在した時期は、15世紀後半から16世紀前半のごく限られた時期と推定した。特に遺物からみると、内耳鍋・青磁・白磁については16世紀前半のものが多く、16世紀後半に比定されるものがほとんどないことから、16世紀前半に最盛期を迎え、16世紀中頃には集落がなくなったと思われる。

16世紀後半に集落がなくなっていたと思われる要因は、文献資料にもみられる。

16世紀中頃から後半にかけては、武田・上杉の争いが激化する時期で、謙信・信玄の最も激しい戦いであった第4次川中島の戦いは、1561（永禄4）年である。この頃から、武田氏が滅亡する1582（天正

10）年まで、牟礼の地は両軍がぶつかりあう最前線であった。

その只中である 1578（天正 6）年、当時武田方につき、牟礼の地を与えられていた長沼城の島津泰忠が、武田方奉行に宛てた文書の中に、現飯綱町内の夏川、福王寺（普光寺）などは、「一切荒所」で年貢が納められないと訴えている（牟礼村 1997）。普光寺は表町から北東約 1 ㎞、夏川は表町から南西へ約 3 ㎞の場所である。普光寺と夏川の間に位置する表町周辺も同様ではなかったかと思われる。表町の集落は、武田・上杉の争いの中で、消えていった可能性が考えられる。

牟礼の地が落ち着いたのは、武田氏が滅亡し織田信長が倒れ、上杉景勝が北信濃を占領した以後のことである。ただ調査所見では、建物跡の切り合いや複数重なる柱穴がほとんどないことや、16 世紀後半から 17 世紀初め頃の遺物もみつからないことから、表町の地に集落が再興された様子はない。

その後、延宝 6（1678）年の検地帳や明治 9（1876）年の古地図によれば、表町付近に家は 1 軒もなく（牟礼村 1997）、現在に至るまで農地の広がる姿が続いてきた。

戦国時代表町に住んでいた人々が移り住んだ場所については、旧牟礼宿の旧家に表町より移ったとの伝承もあり、北国街道沿いの可能性が考えられるが、不明である。

北国街道は、江戸時代初期に整備された脇街道（脇往還）である。中山道追分宿（現北佐久郡軽井沢町）と北陸道直江津（現新潟県上越市）との間を結び、善光寺参詣や佐渡の金を運ぶ道として利用され。五街道に次いで重要な道とされた。

慶長 16（1610）年 9 月 3 日、当時この地を治めていた家康の六男越後高田藩主松平忠輝の家臣から、宿場における規則などをしるした「伝馬宿書出」が、北国街道筋の各宿場に出された。北国街道および牟礼宿は、これをもって成立したといわれている（牟礼村 1997）。

四ツ屋集落の成立について、伝承では牟礼中心部から当初 4 軒の家が街道沿いに移り住み、「四ツ家」と呼ばれ、それが地名の由来とされている。その成立時期については近世初めと伝えられているが、文献史料等がなく断定できない。四ツ屋集落は尾根頂部に位置し、地下水位が低く、水利の便は良くない。街道がなければ、このような場所に住む意味はなく、集落の成立は、街道成立とほぼ同時と考えている。四ツ屋集落は、その集落成立にあたり、街道通行のための必要性から、権力により強制的に移住させられたものか、それとも街道にかかわる利益を求めて、自然発生的に集まってきたものかは不明である。ただ、集落の成立、集落住民の生活には、北国街道の存在が大きく関係していることは間違いない。

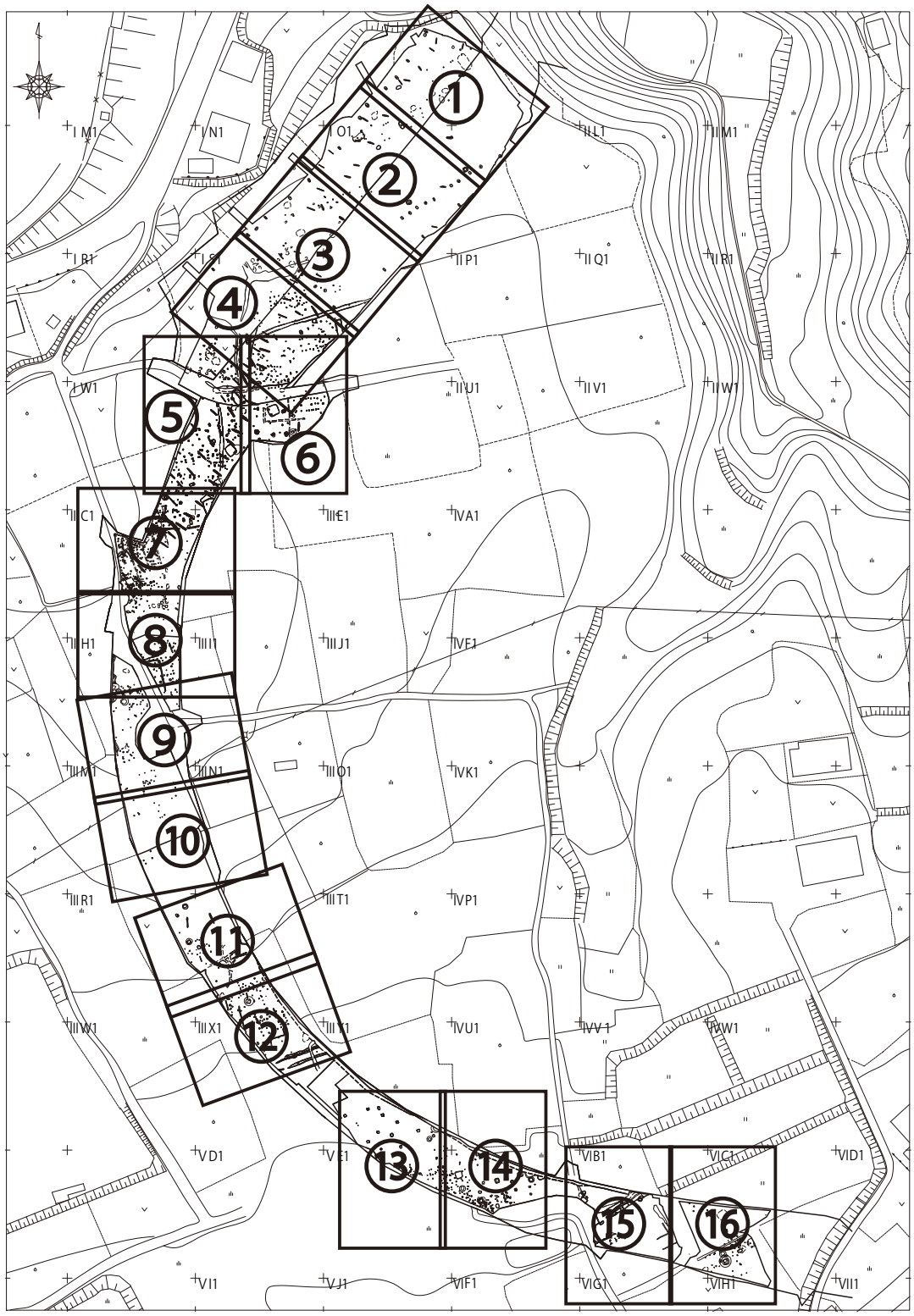
街道に面する四ツ屋集落の背後に位置する西四ツ屋遺跡の発掘調査でも、近世以降は、簡素な構造の小建物はあったものの、住居の裏に廃棄されたと思われる近世～現代の陶磁器片がみられただけで、集落等が広がった様子はない。四ツ屋集落住民の所有する農地などとして江戸時代以降、現在に至るまでその形が続いてきたものと思われる。

今回発掘調査した遺跡の名は、「表町」が中世矢筒城の表に広がる集落、「四ツ屋」は近世初期に移り住んだ 4 軒の家が由来となっている。ともに中世～近世初期にかけての事柄である。地元でも、この時期以降のことについては、歴史として語り継がれてきた。

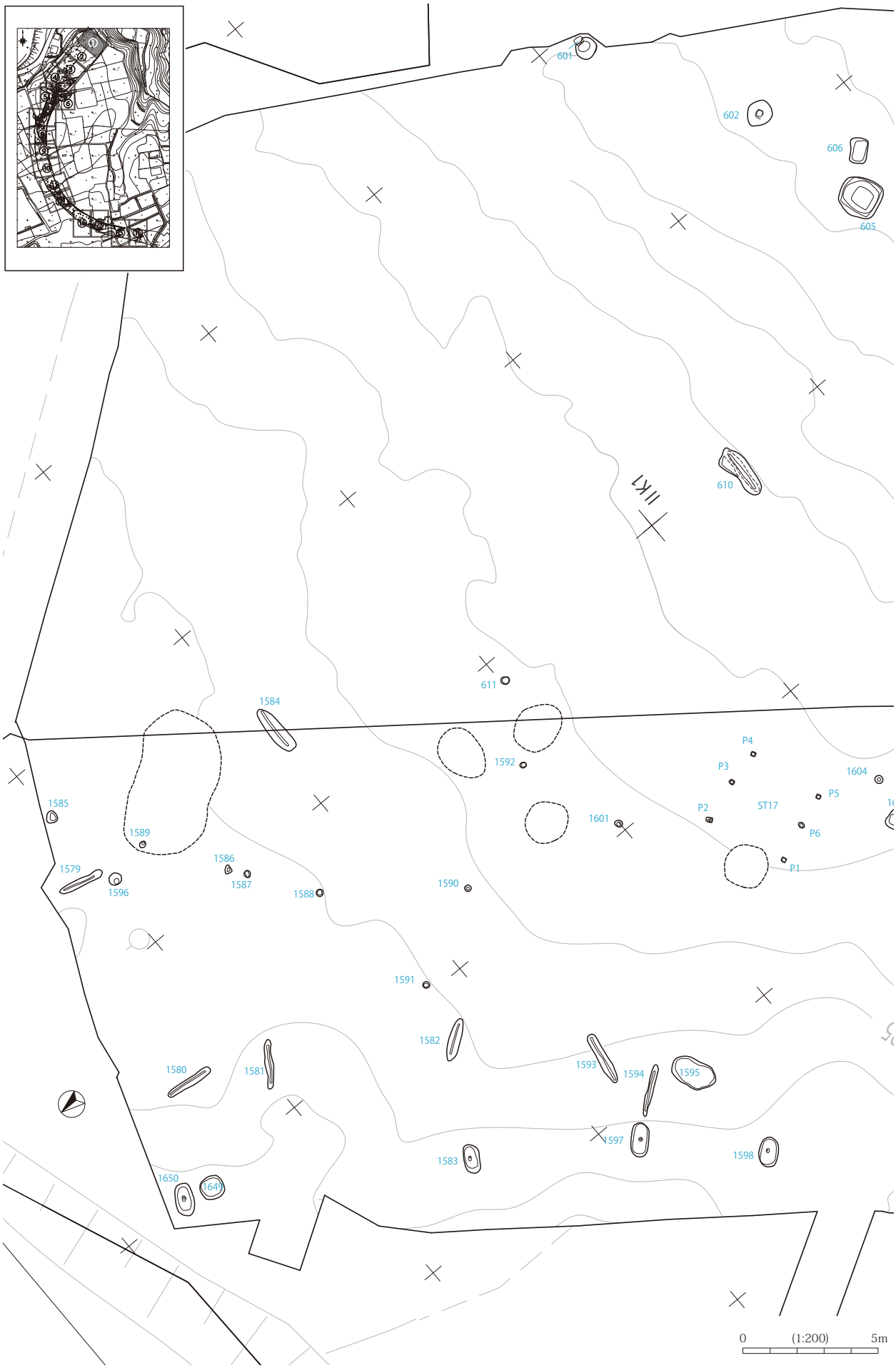
一方、発掘調査では地名の由来以前の時代について多くの成果が得られた。この地が、別の地名でよばれていたか、あるいは名もなき頃の歴史である。表町・四ツ屋周辺の縄文時代や平安時代のことなどは、地域では全く知られていない。今回地域の歴史に新しいページ加えられたことは、大いなる成果と思われる。今後、この発掘成果が、地域史研究の材料として活かされていくことをのぞみたい。

引用・参考文献

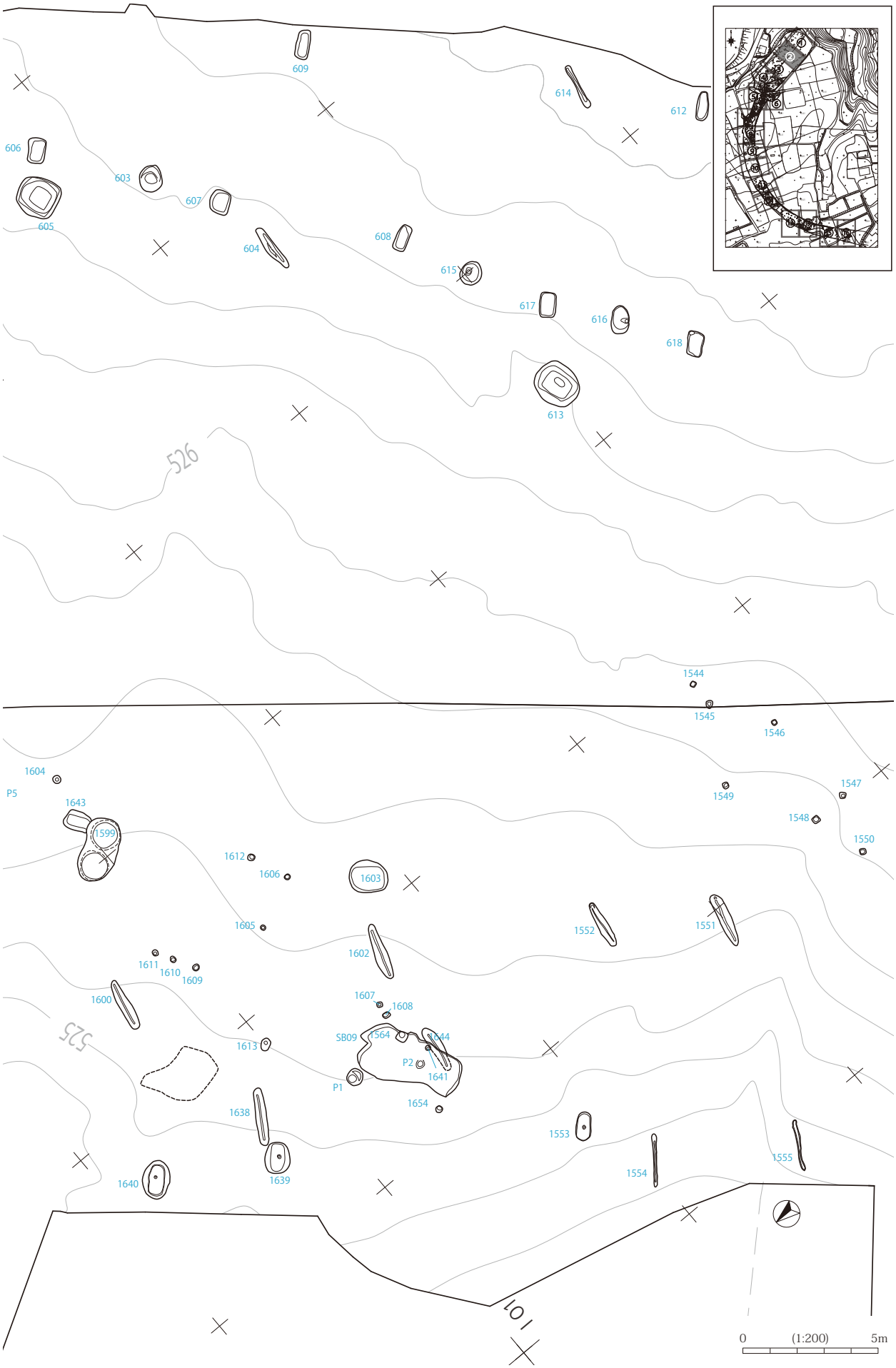
赤塚幹也他　1969 「茶壺－祖母懐壺」『瀬戸市史』
朝岡康二他　1997 『日本民具辞典』日本民具学会
阿部　猛他　2005 『日本古代史事典』朝倉書店
五十川伸矢　1992 「鋳造工人の技術と生産工房」『中世都市と商人職人』名著出版
市川隆之　2005 「北信地域の鍋・すり鉢からみた中世から近世前半」『海なき国々のモノとヒトの動き』内陸遺跡研究会
今村啓爾　1973 『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団
今村啓爾　1983 「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究　2　生業』雄山閣
上田典男　2000 『上信越自動車道６　長野市内その４　松原遺跡　古代・中世本文編』長野県埋蔵文化財センター
上田秀夫　1982 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
植田弥生　2006 『表町遺跡出土木製品の樹種同定』パレオ・ラボ
宇野隆夫　1989 「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社
大泰司紀之　1983 「シカ」『縄文文化の研究　2　生業』雄山閣
大野　亨　2001 「竪穴建物とはなにか」『掘立と竪穴』東北中世考古学会
小野正敏　1982 「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
鐘方正樹　2003 『井戸の考古学』同成社
桐原　健　1967 「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃』第 40 巻第 4 号　信濃史学会
小平和夫　1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線４　松本市内その１　総論編』長野県埋文センター
小林謙一他　2007 「AMS 炭素 14 年代測定を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究」国立歴史民俗博物館
小林謙一　2008 「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学　2　歴史のものさし』同成社
小林　孚他　1986 『前高山窯跡群』牟礼村教育委員会
小柳義男他　1992 「平出東浦遺跡の調査」『平出遺跡群』牟礼村教育委員会
小山岳夫他　1991 『金井城跡』佐久市教育委員会
佐久市教育委員会　2001 「上芝宮遺跡・下曽根遺跡」『佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 88 集』
笹澤　浩　1988 「古代の土器」『長野県史　考古資料編（四）遺構・遺物』長野県史刊行会
笹澤　浩　2004 『田中下土浮遺跡・芋川氏館跡（第３次）』三水村教育委員会
佐藤孝則　1986 「動物生態学かたみた溝状ピットの機能」『北海道考古学　第 22 輯』北海道考古学会
佐藤宏之　1999 「遺構研究　陥し穴」『縄文時代　10』縄文時代文化研究会
三水村誌編纂委員会 1980 『三水村誌』
三水村教育委員会　1992 『三水村の文化財』
澤谷昌英　1997 『芝原尾根遺跡（第１・２次発掘調査』原村教育委員会
四手井綱英　1985 『森林』法政大学出版局
信濃町教育委員会　2003 『信濃町の遺跡分布図』
島田惠子他　1981 『前田遺跡』牟礼村教育委員会
高橋　桂他　1979 『丸山遺跡』牟礼村教育委員会
高橋信雄他　1978 『都南村湯沢遺跡』岩手県埋蔵文化財センター
田中　琢他　2002 『日本考古学事典』三省堂
鳥羽英継　2000 「古代の土器編年」『上信越自動車道 28　更埴市内その７　更埴条里遺跡群・屋代遺跡群総論編』長野県埋蔵文化財センター
中島庄一　1998 「長野県北部飯山市における陥し穴」『貝塚』52・53 合併号　物質文化研究会
長野県埋蔵文化財センター　1989 『中央自動車道長野線　3　塩尻市内その２　吉田川西遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1990a『中央自動車道長野線　6　松本市内その３　下神遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1990b『中央自動車道長野線　4　松本市内その１　総論編』
長野県埋蔵文化財センター　1990c『中央自動車道長野線　8　松本市内その５　北栗遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1994 『中央自動車道長野線　13　更埴市内・長野市内その１　小坂西遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1999 『上信越自動車道　9　長野市内その７　小滝遺跡　北之脇遺跡　前山田遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　2004 『一般国道 18 号（野尻バイパス）　信濃町内その３　仲町遺跡』
中村信博　1998 「溝型陥し穴研究序説」『栃木県考古学会誌』第 19 集
長森英明他　2003 『戸隠地域の地質』地質調査総合センター
西本豊弘　1994 「縄文時代のテリトリーについて」『動物考古学』第２号　動物考古学研究会
野尻湖地質グループ他　1993 「第 11 次野尻湖発掘地の地質」『信濃町立野尻湖博物館研究報告』№.1
野村一寿　1990 「中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線　4　松本市内その１　総論編』長野県埋蔵文化財センター
畑中英二　2006 「信楽焼」奈文研研修『陶磁器調査課程（中世陶磁器）』資料
林　良博　1983 「イノシシ」『縄文文化の研究　2　生業』雄山閣
原　明芳　1996 「信濃における奈良・平安時代の集落展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第７集
原　明芳　2007 「平安時代の集落変遷と「武士」の登場」『長野県考古学会誌』121
パリノ・サーヴェイ　1992 「下芝宮遺跡・下聖端遺跡」『佐久市埋蔵文化財調査報告書第９集』佐久市教育委員会
平山明寿他　2002 『朝日山（２）遺跡』青森県教育委員会
三島正之　2000 「矢筒城の縄張」『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』牟礼村教育委員会
宮坂光昭　1995 「ミシャグジ信仰」『諏訪市史』
三輪茂雄　1978 『臼』法政大学出版局
牟礼村　1997 『牟礼村誌』
牟礼村教育委員会　2000 『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』
森田　勉　1982 「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
森田知忠他　1984 「T ピット論」『北海道の研究１　考古編Ⅰ』清文堂
森　尚登他　1980 『明専寺・茶臼山遺跡』牟礼村教育委員会
守屋昌文　2006 「八ヶ岳西南麓・霧が峰南麓における縄文時代の陥し穴について」『新尖石縄文考古館開館５周年記念考古論文集』茅野市尖石縄文考古館
柳川英司　1999 『師岡平遺跡』茅野市教育委員会
矢野恒雄　1998 『飯綱山の見える村々』ほおずき書籍
山田真一　1997 「甲信」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
吉岡康暢　1980 『越前　珠洲　日本陶磁全集　7』中央公論社
四柳嘉章　2006 『漆』法政大学出版局
米山一政他　1981 『矢筒城館跡』牟礼村教育委員会
米山一政他　1988 『矢筒城館跡（第２次発掘）』牟礼村教育委員会



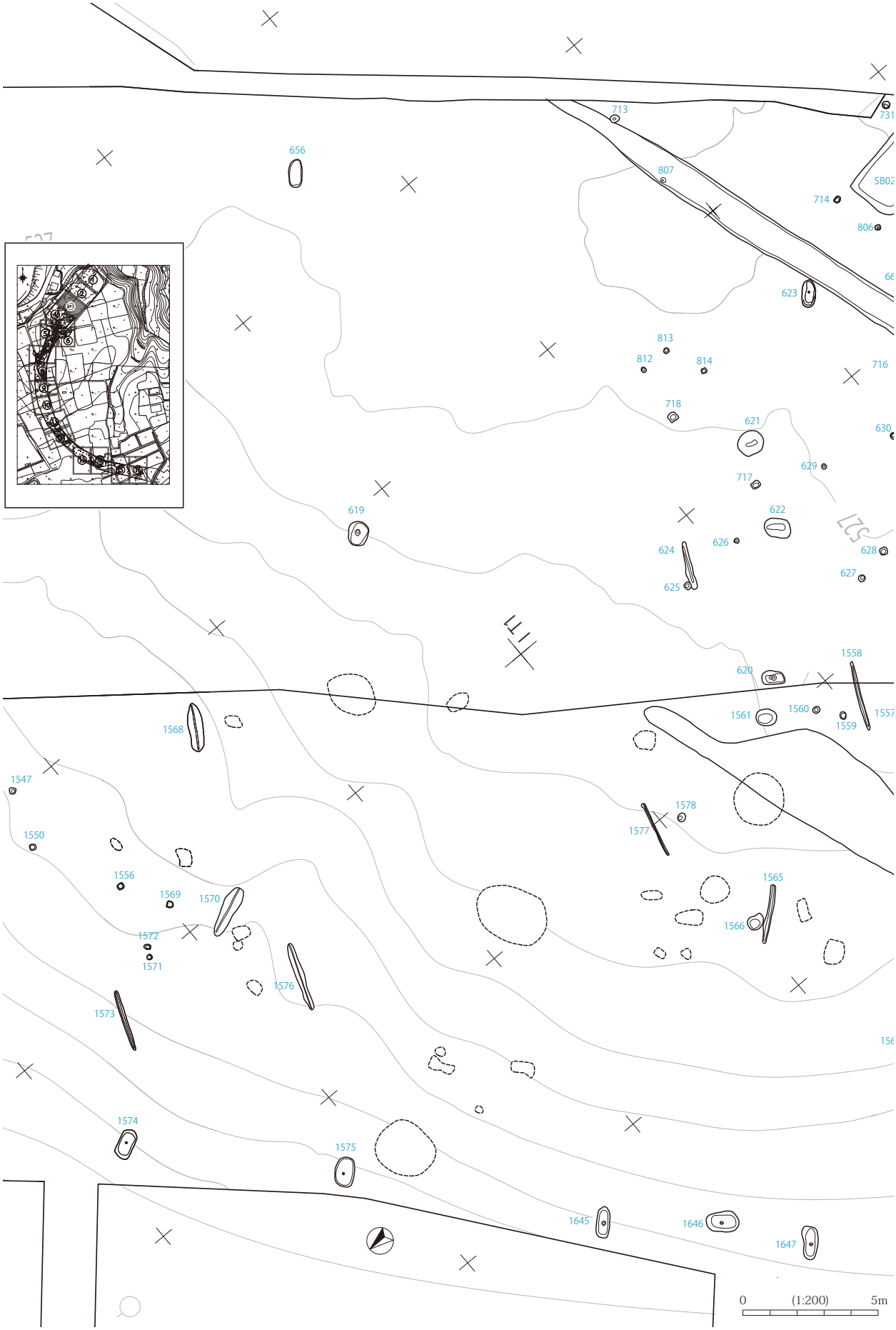
第 127 図　表町遺跡　遺構全体図（割図）



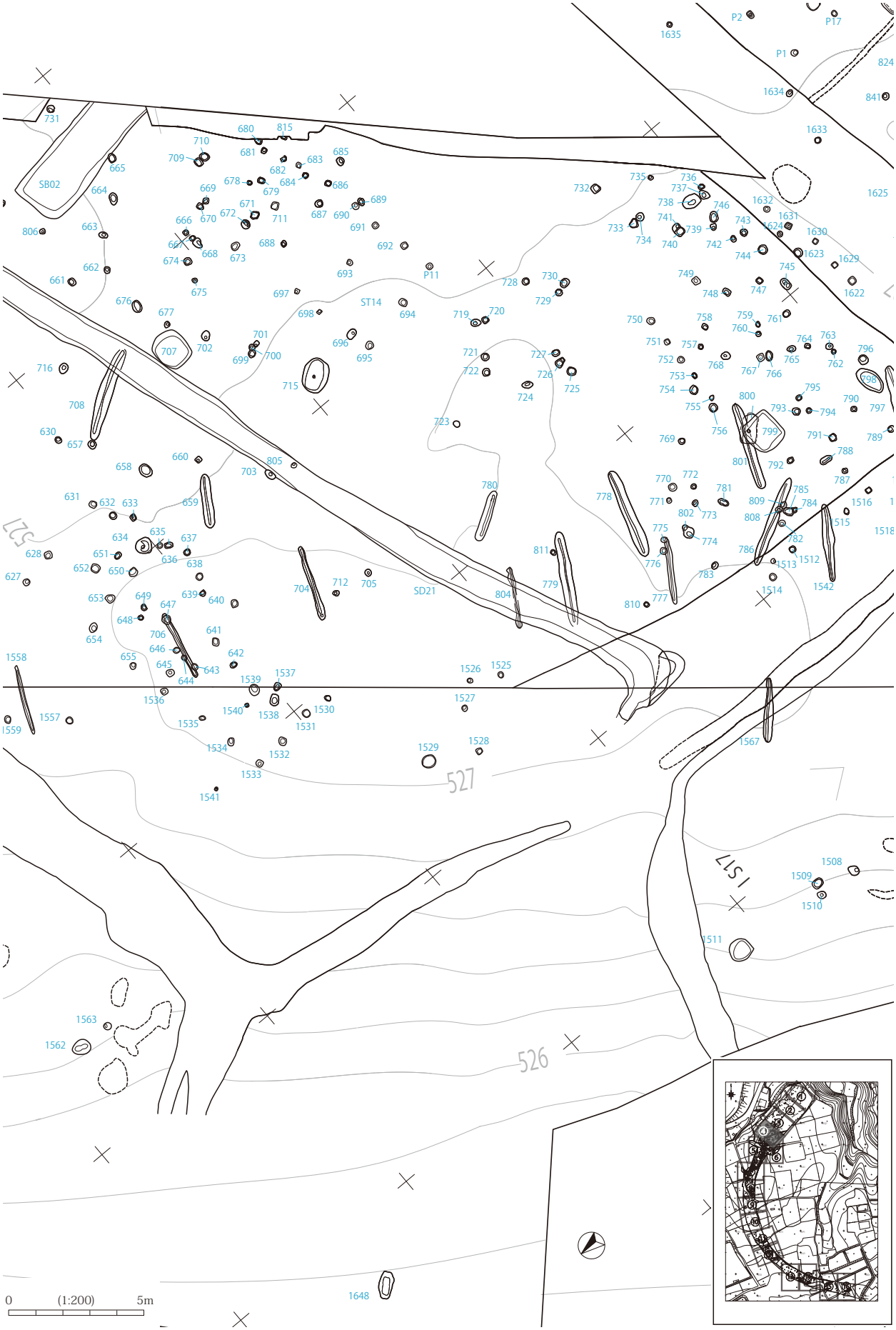
第 128 図　表町遺跡　遺構全体図①



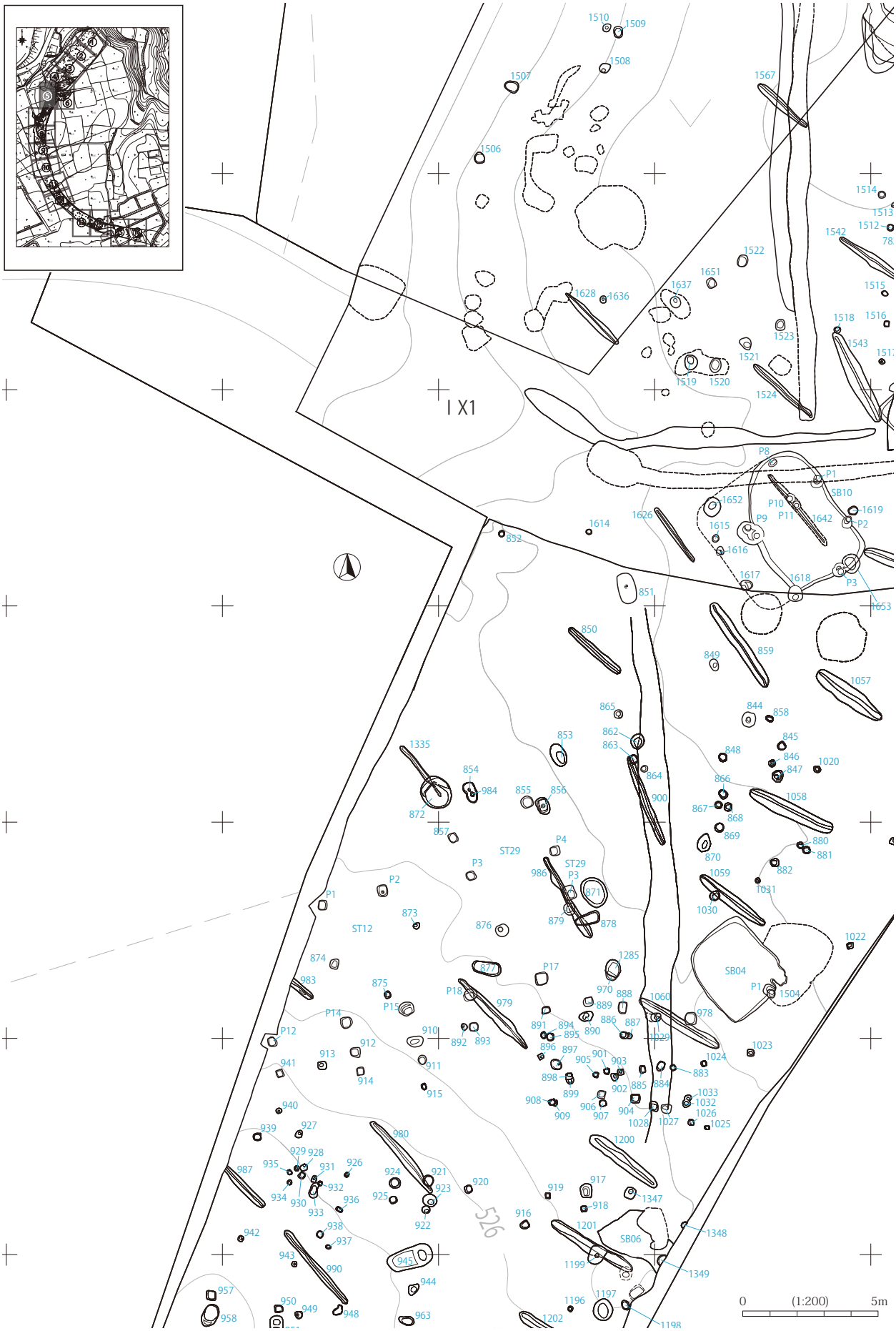
第 129 図　表町遺跡　遺構全体図②



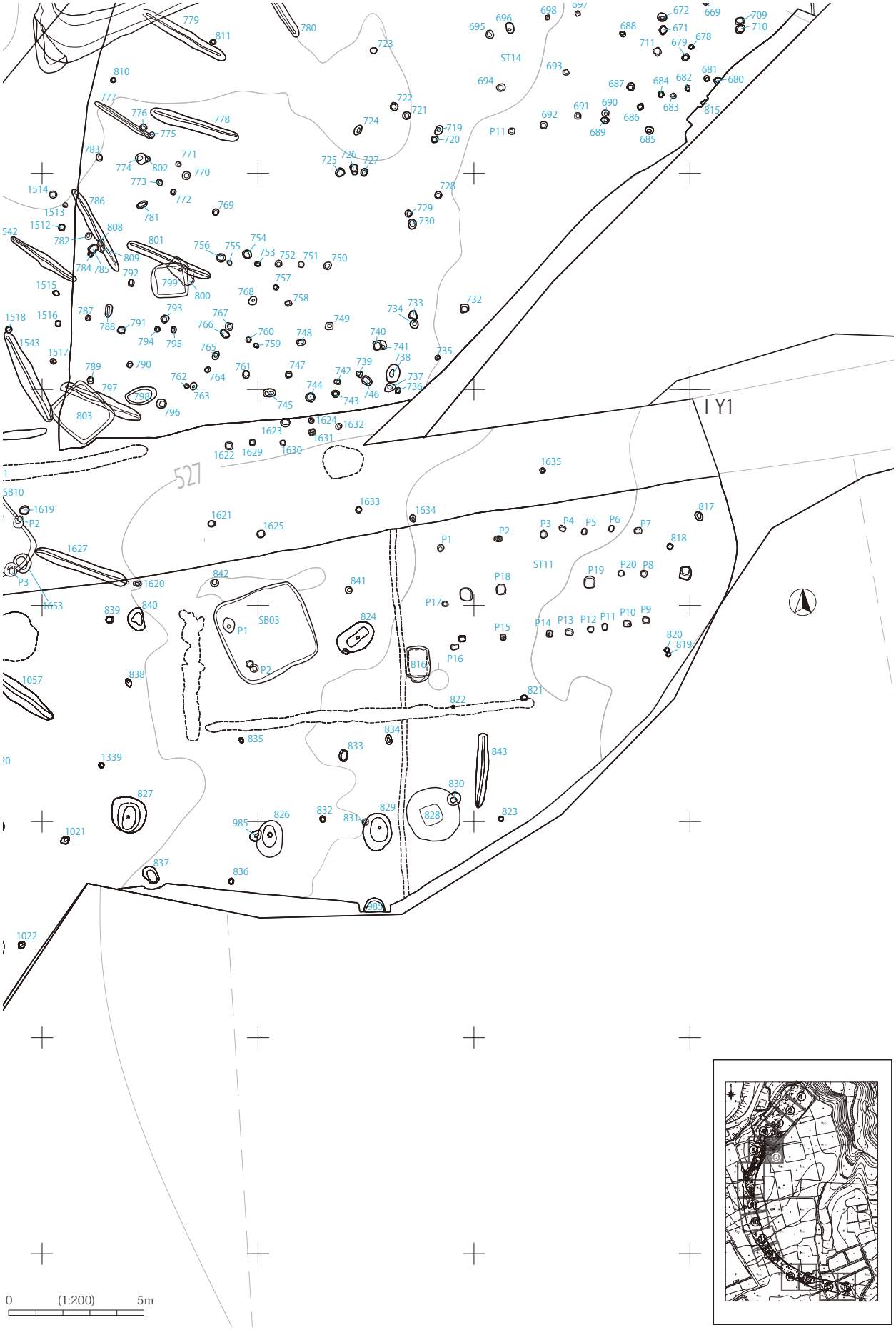
第 130 図　表町遺跡　遺構全体図③



第 131 図　表町遺跡　遺構全体図④

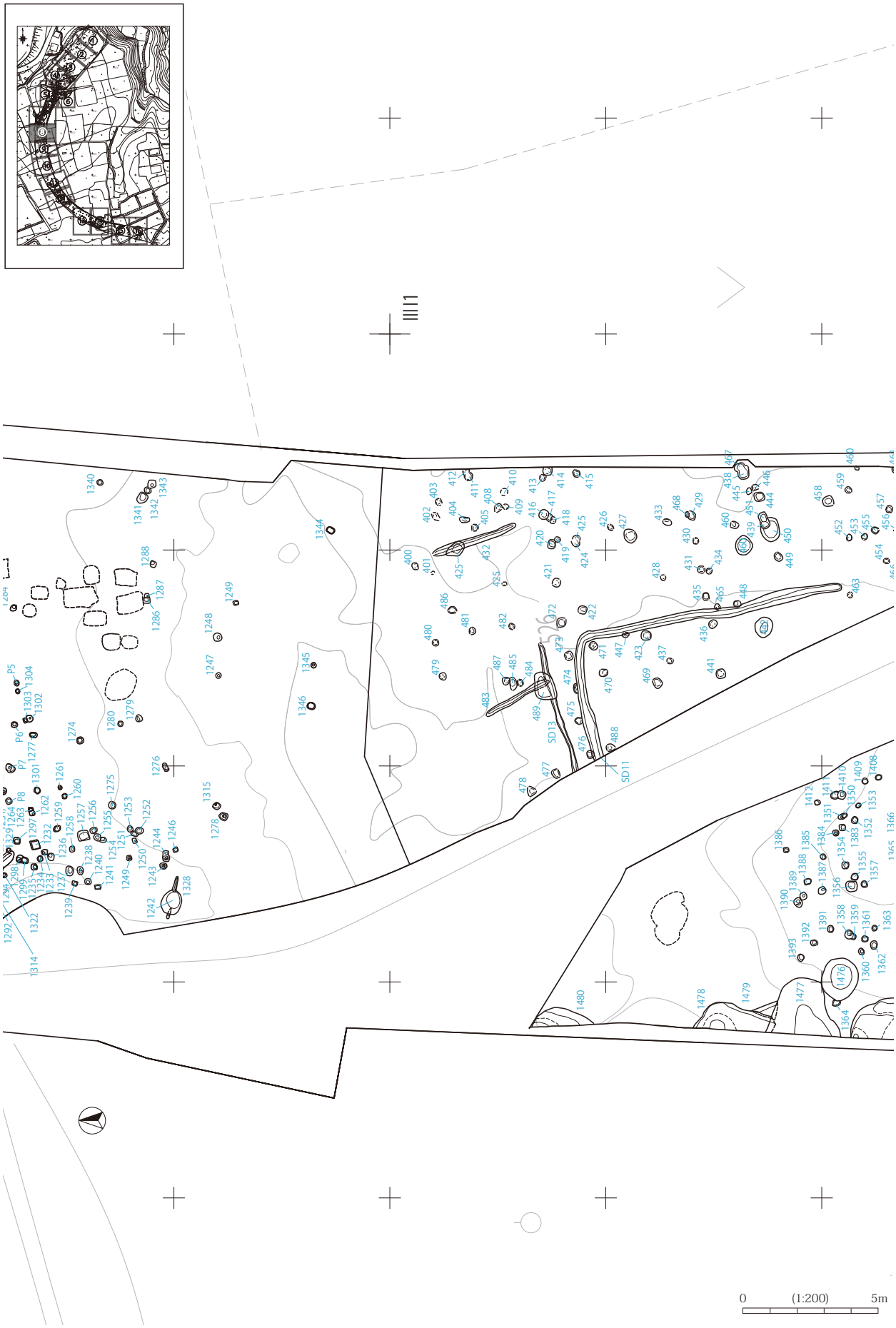


第 132 図　表町遺跡　遺構全体図⑤



第 133 図　表町遺跡　遺構全体図⑥

第 134 図　表町遺跡　遺構全体図⑦

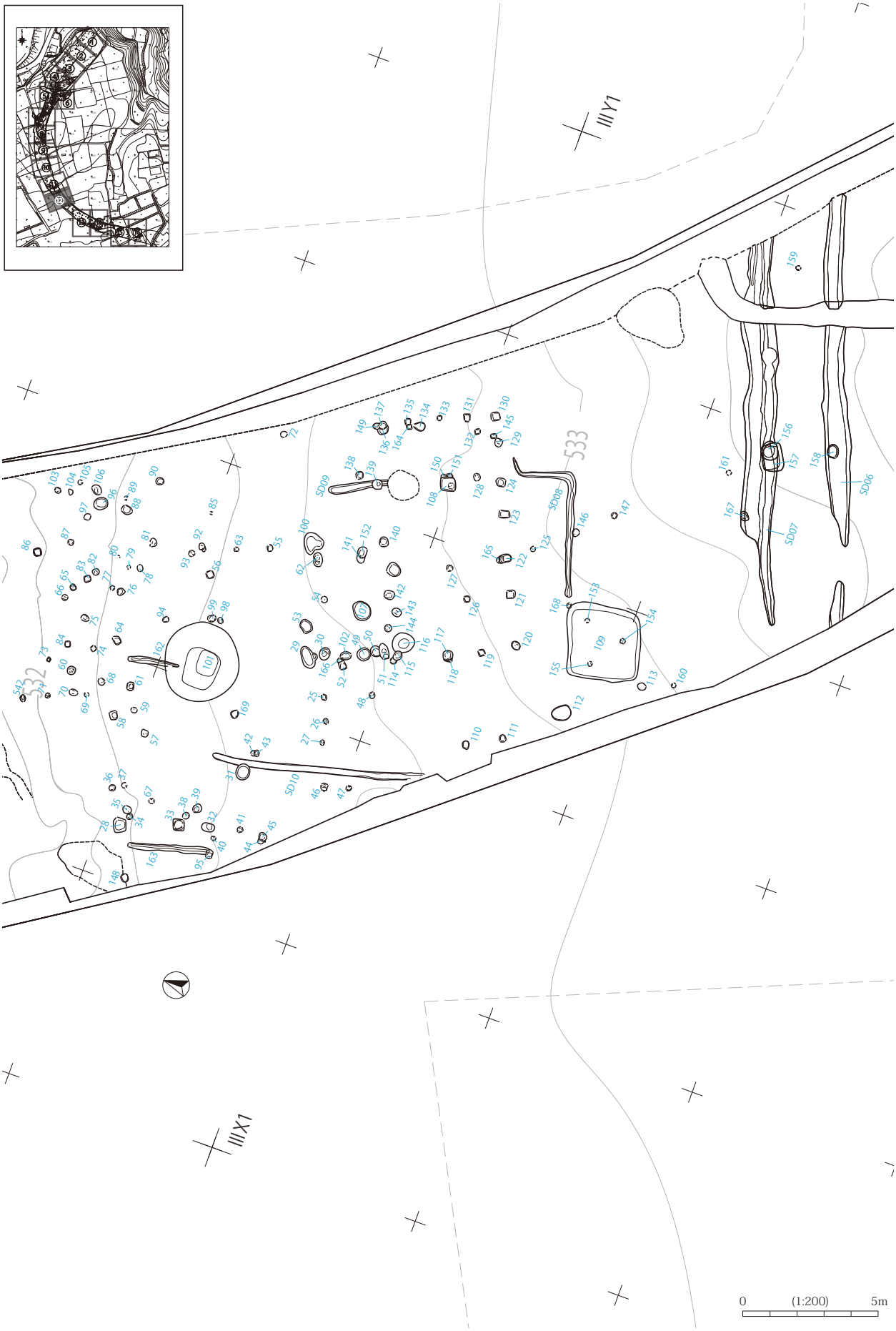


第 135 図　表町遺跡　遺構全体図⑧

第 136 図　表町遺跡　遺構全体図⑨

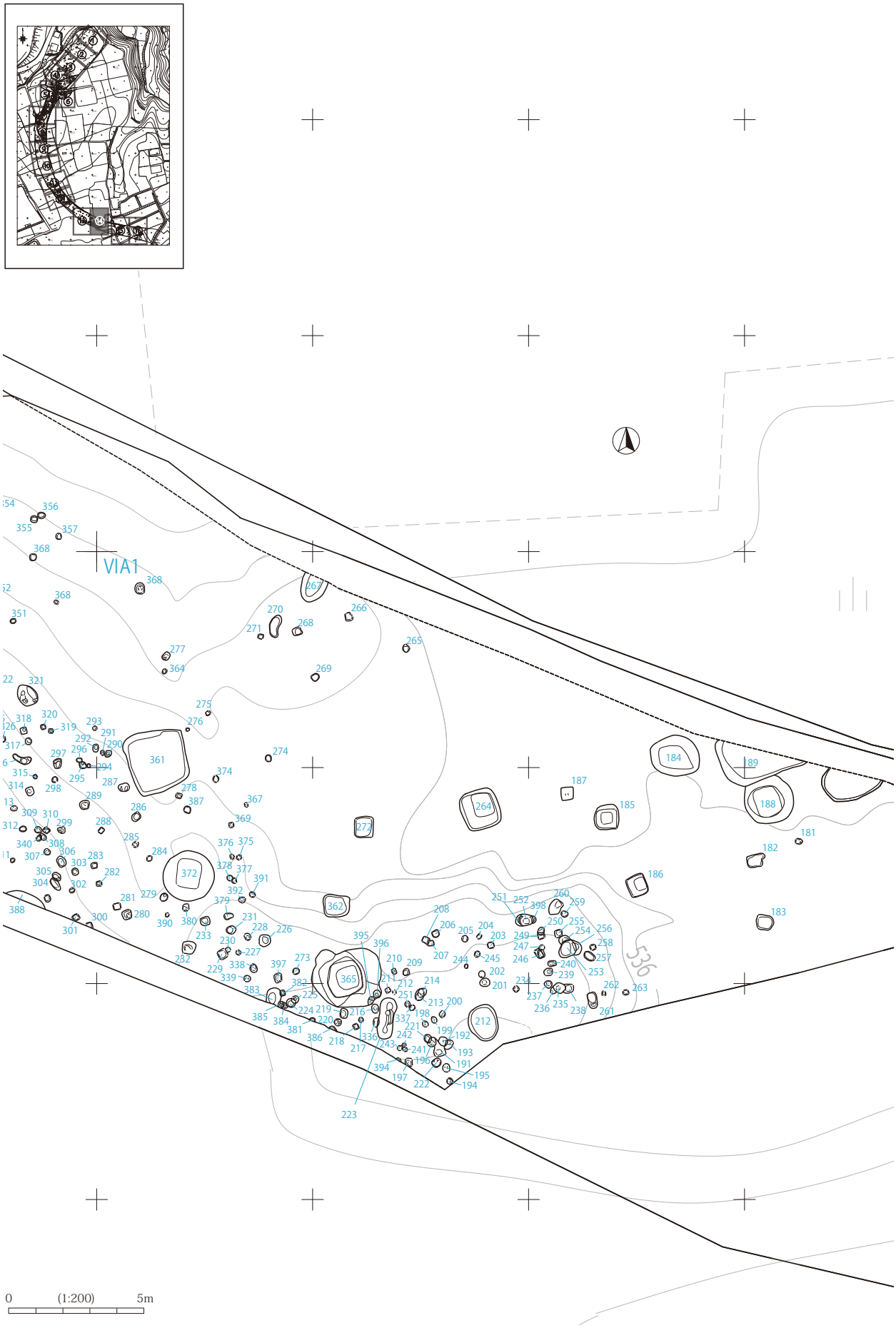
第 137 図　表町遺跡　遺構全体図⑩

第 138 図　表町遺跡　遺構全体図⑪

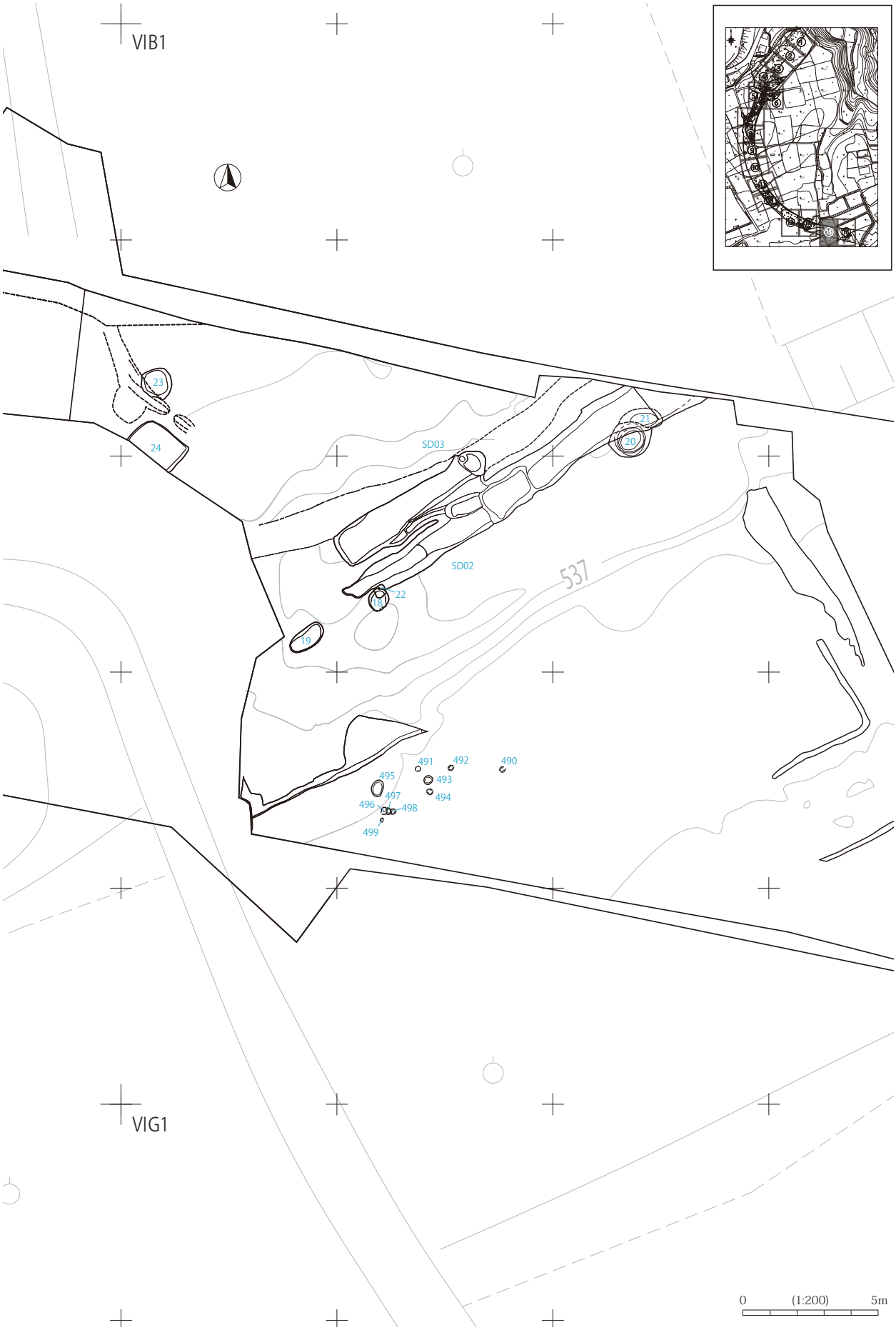


第 139 図　表町遺跡　遺構全体図⑫

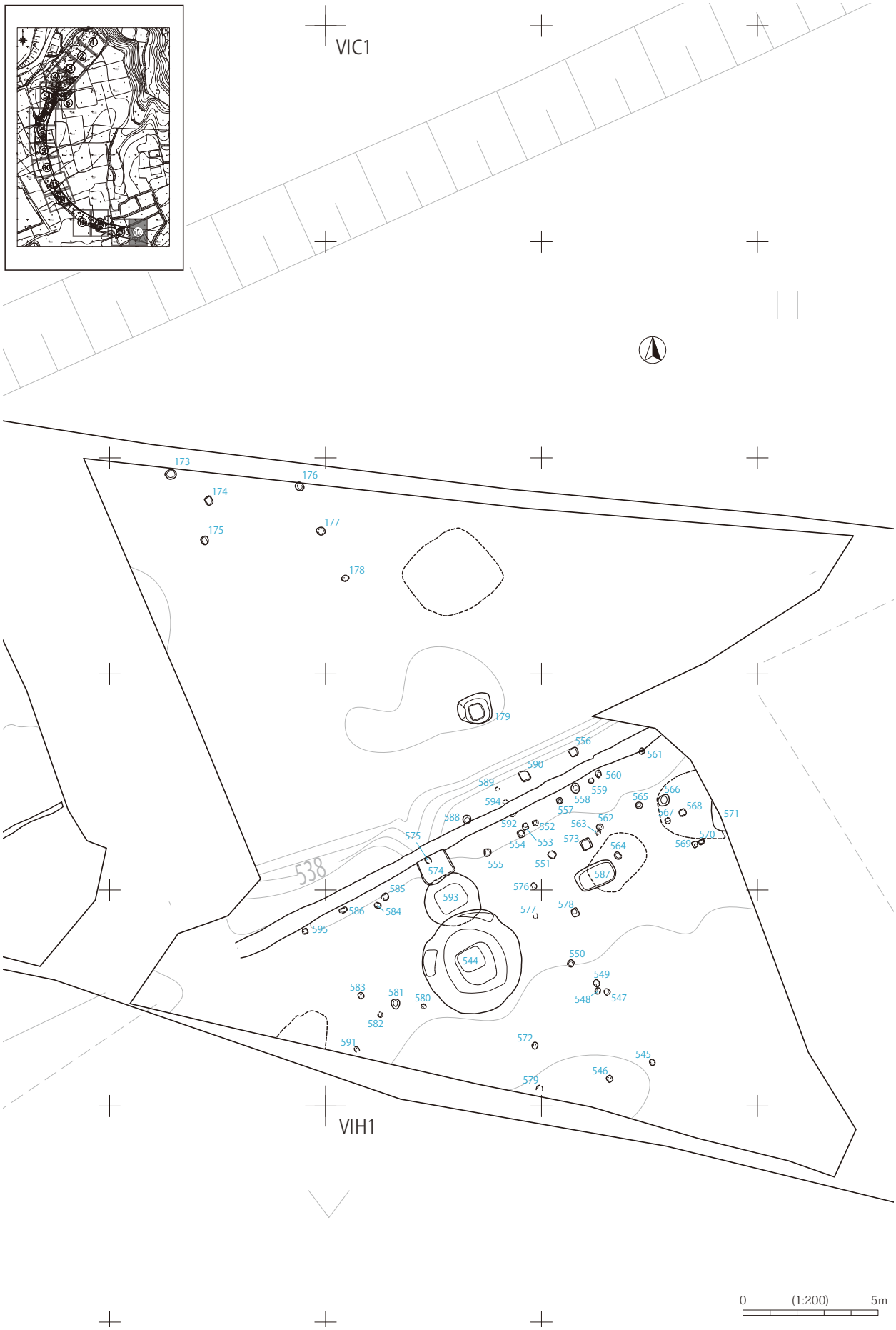
第 140 図　表町遺跡　遺構全体図⑬



第 141 図　表町遺跡　遺構全体図⑭



第 142 図　表町遺跡　遺構全体図⑮



第 143 図　表町遺跡　遺構全体図⑯

西四ツ屋遺跡　遠景　（南より）

３区　全景　（右が北）

SB01　完掘

SB01 カマド　遺物出土状況

ST01　完掘

ST02　完掘

SD01・02　完掘

SD03　完掘

SD05　完掘

SK46　完掘

SB01　完掘

SB03　完掘

SB04　完掘

SB04 カマド　遺物出土状況

SB05　完掘

SB05P1 遺物（87 ～ 89）出土状況

SB06　完掘

SB07・08　完掘

SB09　完掘

SB10　完掘

ST01（戦国）　完掘

ST04（戦国）　完掘

ST04（戦国）P3　埋土断面（柱痕あり）

ST04（戦国）P3　礎石出土状況

ST11（戦国）　完掘

ST14（戦国）　完掘

２区　井戸跡（SK101）と周囲の建物群（ST01 など）　左が北

ST27（平安）　完掘

ST30（平安）　完掘

SK14　平面　断割り前状況

SK14　底部　断面

SK20　石出土状況

SK20　完掘

SK20　石臼（242）出土状況

SK101　石出土状況

SK365　石出土状況

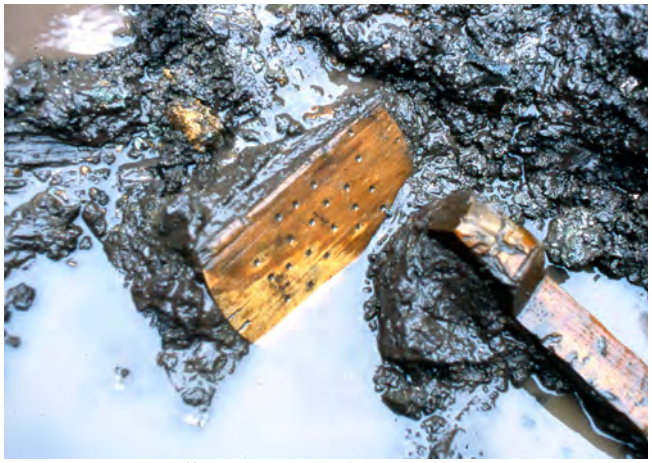
SK372　上部石（現代）出土状況

SK372　上部石断面

SK372　下部石出土状況

SK544　石出土状況

SK544　木製そり（308）出土状況


SK544　蒸籠（せいろ）底板（302）出土状況

SK593　平面　断割り前状況

SK593　断割り後　断面

SK593　曲物（301）出土状況

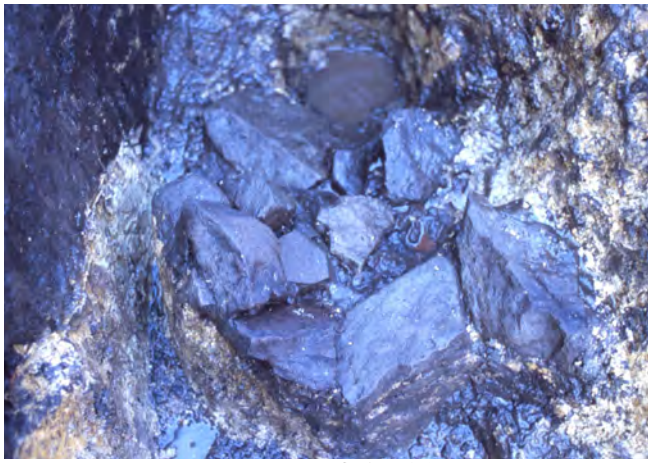
SK605　平面　断割り前状況

SK605　断割り後　断面

SK982　平面　断割り前状況

SK982　断割り後　断面

SK1475　完掘


SK1475　５層内礫出土状況

SB02　完掘（調査区内部分）

SB02　完掘（白線が推定部分）

SB02　石臼（241）出土状況

SK109　完掘

SK361　完掘

SK707　完掘

SK799　完掘

SK803　完掘

SK1543　完掘

SK708　完掘

SK708　断面

SK801　断面

SK989　断面

SK1000　断面

SK1058　断面

SK1201　断面（長軸方向）

SK900　完掘

SK979　完掘

SK1114　完掘

SK786　断面

SK986　断面

SK780　完掘

SK1570　完掘

SK1600　完掘

SK659　断面

SK1582　断面

SK1584　断面（長軸方向）

SK704　完掘

SK1524　完掘

SK1558　完掘

SK704　断面

SK1576　断面

SK801（溝状）・SK800（楕円形）　切り合い断面

SK801・SK800　完掘

SK603　完掘

SK617　完掘

SK619　完掘

SK607　断面

SK619　断面

SK1574　完掘

SK1553　断面

SK1639　断面（長軸方向）

SK1639　坑底ピット　断面

SK609　完掘

SK623　完掘

SK715　完掘

SK715　坑底ピット　検出状況

SK612　断面

SK621　完掘

SK826　完掘

SK827　完掘

SK827　坑底ピット　断面

SD01（近世）　完掘

SD02・03（戦国）　完掘

SD02・03（戦国）　遺物･石出土状況

SD02（戦国）　羽口（319）出土状況

SD21（戦国）　完掘（東より）

SD21（戦国）　覆土断面

SD21（戦国）　遺物出土状況（西より）

SD21（戦国）　石臼（243）出土状況

SQ01　遺物出土状況

SQ01　完掘

SF01　検出状況

SF01　硬化面状況

SK1061（平安）遺物（150）出土状況

SK16（戦国）　石出土状況

SK16（戦国）　石鉢（271）出土状況

SK1599（近世）　完掘（馬歯出土土坑）

1

2

石器（縄文）

ＳＢ０１

4

6

12

11

13

14

1 号竪穴住居跡出土土器（平安）

ＳＢ０１

15

16

17

ＳＢ以外

21

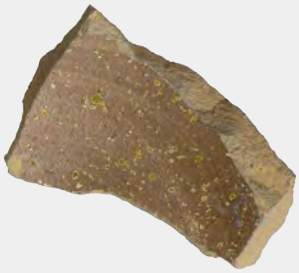
22

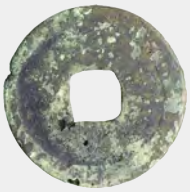
青磁
３区

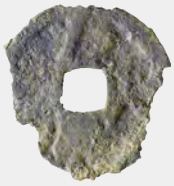
近世

23

24


25


26



27

１号竪穴住居跡・ＳＢ以外出土土器・銭貨（平安・中世・近世）

陥し穴

28

29

30

31

32

33

34

陥し穴以外

35

36

37

38

39

40

41

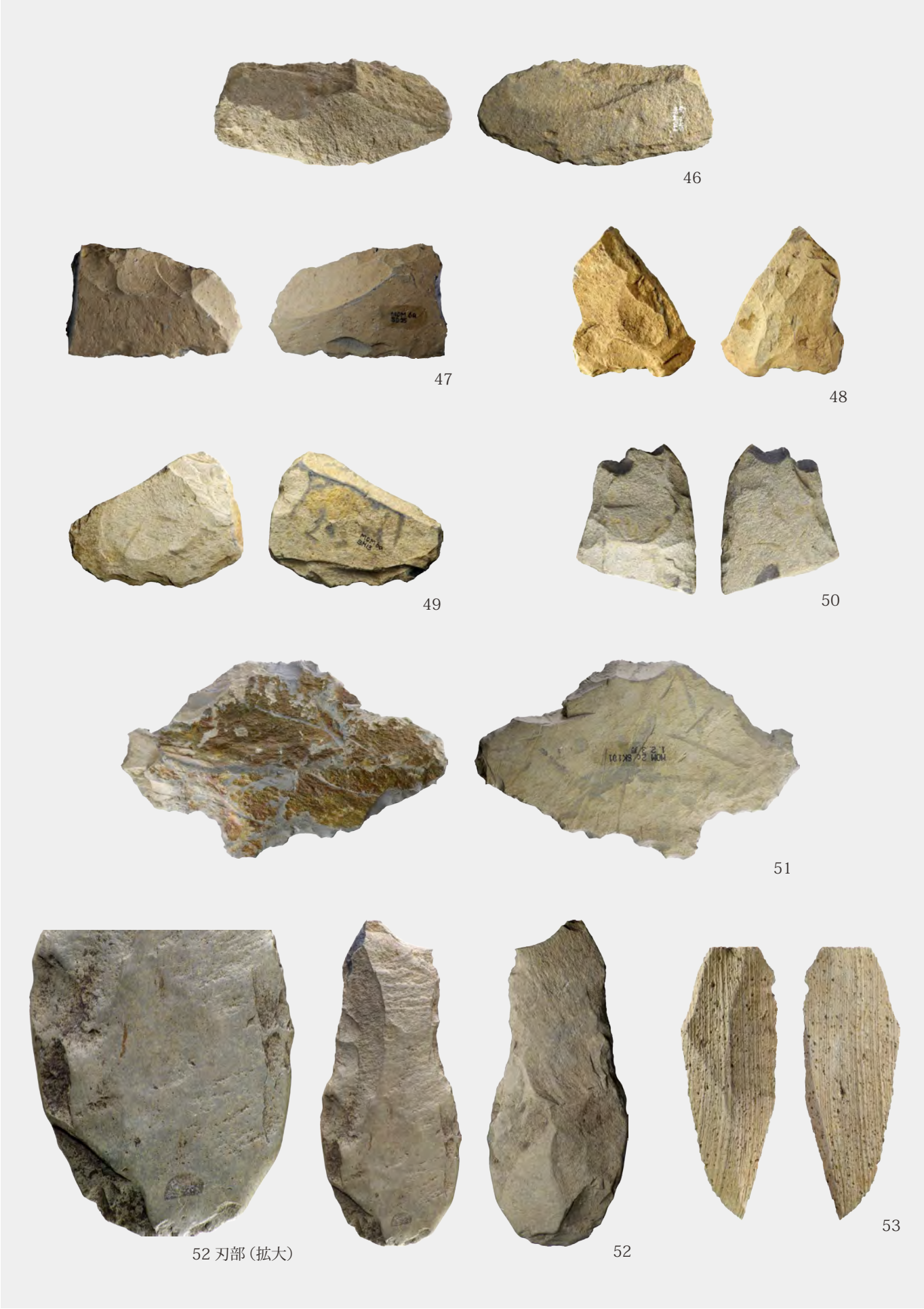
42

43

44

45

土器・石器（縄文）



石器（縄文）

ＳＢ０１

56

57

59

61

63

64

ＳＢ０３

67

70

75

76

ＳＢ０４

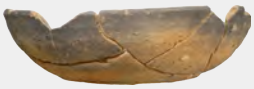
80

82

83

84

ＳＢ０５


87

90

88

89

89 墨書「世」

1号・3号・4号・5号竪穴住居跡出土土器（平安）

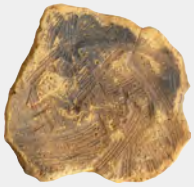
５号・６号・７号・９号竪穴住居跡出土土器（平安）

ＳＢ１０

123

124

129


132

125

126

ＳＱ０１

134

135

139

140

ＳＴ２７

144

ＳＫ・ＳＤ

146

149

150

151

152

154

156

遺構外

159

160

161

10 号竪穴住居跡・土器集中遺構・掘立柱建物跡・土坑・溝跡・遺構外出土土器（平安）

竪穴状遺構・大型方形土坑・井戸跡出土土器（戦国）

溝跡出土土器・土製品（戦国）

溝跡・土坑・遺構外出土土器（戦国）

241

242

243

243 引手孔（拡大）

244

245

246

247

248

249

250

251

252

石製品〔石臼〕（戦国）

石製品〔石臼・茶臼〕（戦国）

石製品〔石鉢・砥石〕（戦国）

石製品〔凹石・石錘・五輪塔〕（戦国）、〔多孔石〕（時期不明）

299

300

301

302

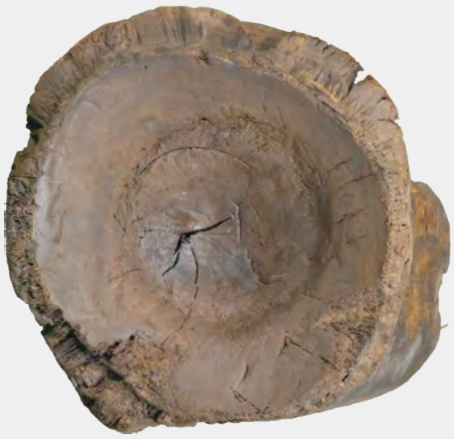
303

304

305

306

木製品〔漆椀・曲物・手馬鍬・製材・杭〕（戦国）



307

308

木製品〔臼・そり〕（戦国）

金属製品・羽口（戦国）

２号・３号溝跡及び周辺出土鍛冶滓（手前　椀形鍛冶滓）

陶磁器（近世）

金属製品（近世）

報告書抄録

ふりがな	（しゅ）ながのあらせばらせん（よつやばいぱす）けんせつにともなう まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	（主）長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	西四ツ屋遺跡　表町遺跡
巻次	飯綱町内
シリーズ名番号	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　90
編著者氏名	中野亮一
編集発行機関	財団法人　長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963－4　℡：026－293－5926
発行年月日	2009（平成21年）3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
西四ツ屋遺跡（にしよつやいせき）	長野県上水内郡飯綱町牟礼（ながのけんかみみのちぐんいいづなまちむれ）	205907	68	36度44分37秒	138度14分32秒	2004年8月2日～11月30日	7,000㎡	（主）長野荒瀬原線四ツ屋バイパス建設に伴う事前調査
表町遺跡（おもてまちいせき）	長野県上水内郡飯綱町牟礼（ながのけんかみみのちぐんいいづなまちむれ）		63	36度44分49秒	138度14分10秒	2005年8月1日～12月9日 2006年4月26日～11月30日 2007年4月9日～6月29日	15,400㎡	

所収遺跡	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
西四ツ屋遺跡	三登山北麓斜面の先端部	集落遺跡	縄文時代	なし	石器	
			平安時代～近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡 土坑	土器・陶磁器・銭貨	
表町遺跡	三登山北麓斜面の先端部	狩猟場 集落遺跡	縄文時代	陥し穴	土器・石器	縄文時代後期列状に並ぶ溝状陥し穴、中世山城の眼前に広がる戦国時代集落跡
			平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土器集中 焼土坑 土坑	土器	
			戦国時代	掘立柱建物跡 竪穴状遺構 井戸跡 溝跡 土坑	土器・陶磁器・石製品（石臼・茶臼・石鉢・砥石など）・木製品（漆椀・曲物・手馬鍬・臼・そりなど）銭貨・鉄製品・羽口・鍛冶滓	
			近世	掘立柱建物跡 土坑	陶磁器・銭貨・煙管・かんざし	

両遺跡とも、飯綱町と長野市の境にある三登山の北麓斜面に立地する。表町遺跡のすぐ北には、中世の矢筒城館跡が隣接している。表町の名は、城の表（南）に広がる集落があったとの言い伝えからつけられたとされており、調査の結果、伝承どおり、約500年前、戦国時代の集落跡が確認された。集落内の井戸跡からは、鍬、臼、そりなど戦国時代の木製品が出土している。また、ほかにも平安時代前期の集落跡や縄文時代早期・前期・後期にわたる陥し穴が確認された。縄文時代後期の陥し穴は、細長い溝状で、列をなして並んでおり、中には100m以上続いているものもある。

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　90

（主）長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—飯綱町内—

西四ツ屋遺跡
表　町　遺　跡

発　行　平成 21（2009）年 3 月 27 日
発行者　長野県長野建設事務所
（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail　maibun@grn.janis.or.jp
印　刷　富士印刷株式会社
〒 380-0911 長野市稲葉中河原 909 番地
Tel 026-221-2141　Fax 026-221-4155